

ロレンスの詩 ‘Snake’ をめぐって

古 我 正 和

ロレンス (D. H. Lawrence) は1912年に初めてヨーロッパ大陸に渡り、第一次世界大戦が始まる直前の二年間をそこで過ごした。帰国後にもう一度大陸やアメリカへ「脱出」しようとするがそれは成功せず、大戦が終結した一年後の1919年の末、やっとそれが実現する。そして翌1920年の初めに、シシリー島のタオルミナ (Taormina) に家を借りて落ち着く。彼は1922年の初めまでの二年間そこに滞在するが、その間にシシリー島の各地やマルタ島、イタリア本土などを旅行し、『アロンの杖』 (*Aaron's Rod*) や『無意識の幻想』 (*Fantasia of the Unconscious*) などを執筆し、『恋する女たち』 (*Women in love*), 『迷った女』 (*The Lost Girl*), 『精神分析と無意識』 (*Psychoanalysis and the Unconscious*) を出版し、『ヨーロッパ史の諸運動』 (*Movements in European History*) と『海とサルジニア』 (*Sea and Sardinia*) とはこの期間に執筆と出版の両方が実現するなど、この期間は小説からエッセイ、旅行記と幅広い作家活動がおこなわれた、多産な時期だった。

‘Snake’ の詩はこの時期に書かれたものであろう。タオルミナに滞在していたロレンスは多くの動植物に出くわすが、とりわけ蛇は彼の注意を引いたものであった。

この詩は蛇との出会いから始まる。夏の暑い昼間、彼は暑さのためパジャマ姿で、水を飲みに宿の水鉢の所へ行くと、

A snake came to my water-trough
On a hot, hot day, and I in pyjamas for the heat,
To drink there.

一匹の蛇が水を飲みそこにへやって来た。to drink there は「私」と「蛇」の両方がおこなう行為である。人間も蛇も暑ければ喉が乾くのだ。came という動詞は、snake の次に一度だけ書かれていて、I の次には書かれていない。came も共通の行為である。「水を飲む」という行為を、単に人間だけではなく生き物に共通なものとして、ロレンスは考えていることが分かる。

In the deep, strange-scented shade of the great dark carob-tree
I came down the steps with my pitcher 5
And must wait, must stand and wait, for there he was at the trough
before me.

He reached down from a fissure in the earth-wall in the gloom
And trailed his yellow-brown slackness soft-bellied down, over the edge
of the stone trough
And rested his throat upon the stone bottom,
And where the water had dipped from the tap, in a small clearness, 10
He sipped with his straight mouth,
Softly drank through his straight gums, into his slack long body,
Silently.

私は先着者を前にして待たねばならない。蛇は薄暗い土塀の隙間から体ヲ垂らし、柔らかい腹をして褐色がかった黄色の弛んだ細長い体を、石鉢のへりを乗り越えて持ち上げ、小さな光った水滴が、蛇口からポトポトと落ちている石の底にその喉を置いてそっと水を飲んでいた。

Someone was before me at my water-trough,
And I, like a second comer, waiting. 15

ここでは6行目と同じことが繰り返して述べられる。6行目の he は、ここでは someone となる。he でも擬人的であるが、someone になると一層その程度が強くなる。before me も繰り返して述べられていて、ロレンスがこのことを強く意識していたことが分かる。次の like a second comer でも分かるように、ロレンスは蛇と私とを全く同等の資格と権利を持った存在として考え、私

は人間同士が順番を待つように、蛇が水を飲み終わるまで待つのである。

He lifted his head from his drinking, as cattle do,
And looked at me vaguely, as drinking cattle do,
And flickered his two-forked tongue from his lips, and mused a moment,
And stooped and drank a little more,
Being earth-brown, earth-golden from the burning bowels of the earth 20
On the day of Sicilian July, with Etna smoking.

蛇が水を飲み始める。16行と17行では蛇は家畜の牛と同じようなしぐさで飲むが、18行では蛇は家畜としての牛とは違ったしぐさを示す。flickered his two-forked tongue from his lips がそれである。この動作は、人間に慣れ親しんだ家畜ならば行わない、恐ろしい威嚇である。

さらに20—21行でも気味悪い記述がなされる。蛇の色についてであるが、それが「エトナ火山が噴煙をあげている、7月のシシリー島の屋下がり、地球の燃える内部から出た大地の茶色・大地の金色をして」いるというのである。この表現は前の flickered his two-forked tongue (二股に分れた舌をちらつかせた) というのと同じく不気味である。earth-brown や earth-golden, the burning bowels of the earth は分かり難いが、Etna smoking まで読むとそれが明らかとなる。the burning bowels とはエトナ火山が噴き出す地球のマグマであり、earth-brown や earth-golden はそのマグマにかかわる色なのである。ここで先にみた7行目の a fissure in the earth-wall in the gloom が思い出される。何の気なしに読んでいた箇所ではあったが、ここまで読みすすむと、この earth-wall は「地球の表面を覆う壁」とも考えられ、さらに a fissure は「地球のさけめ」すなわち噴火口となり、in the gloom は地中の「闇」を暗示するに似つかわしい言葉となる。この詩の中に earth という言葉がしきりに出てくる一つの理由が納得されるのである。

この部分では、人間に馴れ親しんだ家畜である牛が行うと同じ蛇の動作を描くことによって、ロレンスは蛇に対する優しさを表わしているが、同時に蛇に対する恐ろしさも表していることになる。

The voice of my education said to me
He must be killed,
For in Sicily the black, black snakes are innocent, the gold are venomous.

先に述べた蛇の「地球の内部の金色」は、ロレンスが受けた教育によれば毒を持つ蛇の色であり、そのような蛇の存在は許されてはならない。そこで彼の内部の声が叫ぶ。

And voices in me said, if you are a man
You would take a stick and break him now, and finish him off.

25

彼の内部の声は彼の受けた教育の声であり、それが彼に蛇を殺すことを命ずるのである。

ところで、彼はその「教育の声」に従うであろうか。先の牛の動作と同じように蛇の動作を描くことによって、蛇に対する優しさが示されたが、その気持はどうなるであろうか。ここで蛇に対する優しさが再び表れる。

But must I confess how I liked him,
How glad I was he had come like a guest in quiet, to drink at my
water-trough
And depart peaceful, pacified, and thankless,
Into the burning bowels of this earth?

30

あたかも地下の王のように堂々とやって来て、何の断りもせずに彼の水鉢から水を飲み、その体の色にも似た燃える地球の内部へと、お礼の一言も言わずに泰然自若として帰って行くその蛇に、ロレンスは得も知れぬ親近感を抱くのである。この時ロレンスの受けた教育は効果を持たない。ロレンスにとって蛇は「もの言わぬ」お客であり、蛇を殺すよりもむしろ水を一杯振舞ってやりたい気持なのである。とはいふものの彼は、自分が受けた教育と自分の内部から沸き起こる、蛇への親近感との間の隔たりを強く感じる。

Was it cowardice, that I dared not kill him?
Was it perversity, that I longed to talk to him?

Was it humility, to feel so honoured?

I feel so honoured.

自分が学んだ教育に従って蛇を殺せないのは自分が臆病であるためなのか、また蛇に語りかけようと思うのは気紛れのためか、とここでロレンスは自問する。ともかく、彼はここで誇り高い気持になる。しかし教育の声は容易に退かない。

And yet those voice:

35

If you were not afraid, you would kill him!

And truly I was afraid, I was most afraid,

But even so, honoured still more

That he should seek my hospitality

From out the dark door of the secret earth.

40

自分が蛇を殺せないのは、臆病のためであるとロレンスはここで認める。けれども、それにもかかわらず、それだからますます彼が誇り高く感じるのは、その蛇が秘密の地球の暗い戸口から、自分の歓待を求めているのだと思うからである。先の牛の比喻といい、ここで述べられる比喻といい、ロレンスがいかにも動物に対して、擬人的な優しさを持っていたかを示していると言えよう。この蛇はもはや「毒蛇」などではなく、未知の暗い地球の中心から来た使者なのだ。この「未知の暗い地球」には、深い意味が込められている。

さて水を飲む蛇はどうなったであろうか。

He drank enough

And lifted his head, dreamly, as one who has drunken,

And flickered his tongue like a forked night on the air, so black;

Seeming to lick his lips,

And looked around like a god, unseeing, into the air,

45

And slowly turned his head,

And slowly, very slowly, as if thrice adream,

Proceeded to draw his slow length curving round

And climb again the broken bank of my wall-face.

今さらながら上に用いられている6つの he や his が強く感じられる。それに drank, dreamly, drunken, one, god, adream。これらは人間の描写によく用いられる言葉である。蛇は文字どおり神、暗い地中から遣わされた神であり、その舌がチラチラ動くと、それは暗く、「二股になっ（て燃える）夜」のように燃えさかる。そうしておもむろに、見るともなくあたりを見まわし、体を捻じ曲げながら土塀の隙間の中へと戻って行くのである。ここでもまた「暗い地球」のイメージが、またそれに加えて「夜」のイメージがみられる。

And as he put his head into that dreadful hole, 50
And as he slowly drew up, snake-easing his shoulders, and entered
farther,
A sort of horror, a sort of protest against his withdrawing into that
horrid black hole,
Deliberately going into the blackness, and slowly drawing himself after,
Overcame me now his back was turned.

初めの2行の最初の And as が妙に気になる。前の方をみると、この And は42行目から始まっていることが分かる。そうして次に蛇のしぐさが来ている。これは次々に起る蛇の振る舞いに、ロレンスが啞然として見ている、その驚きを示す繰り返しであろう。そう言えばこのような蛇の動作の前の And は、8、9、10行や17、18、19行にも連続してみられるものである。

蛇に対する優しさと不気味さとは前にも述べたが、上でみるような次々に起る蛇の不気味な振る舞いに接し、最後に蛇が「恐ろしい暗い穴」へと入って行くのを見て、ロレンスには再び恐怖が沸き起こる。水を飲んだり首をもたげたりするのを見ている時には、蛇に対して優しい気持ちを持てたのが、今「恐ろしい暗い穴」の中へ入っていくのを見るにいたって、恐ろしい気持ちになるのである。

51行目の snake-easing は、縦横無尽に曲りくねる蛇のしぐさを表わすのに、まことに適切なロレンスの造語である。54行目の his back was turned は、文字通り「背を返して腹を見せる」という不気味な蛇の行為の他に、「(私を)

見捨てて立ち去る」という慣用的な意味を持ち、29行目の And depart peaceful, pacified, and *thankless* (イタリックスは筆者) と呼応するのである。

ともあれ、未知の暗い地球の中心からの来訪者・使者は、このようにして素っ気なく立ち去って行く。55行から62行（本稿では省略）で私が棒切れをその水鉢めがけて投げつけると、蛇は慌てた様子で体をくねらせながら、大地の裂け目の黒い穴の中へ入って行き、私はあっけにとられてそれを見る。そして、

And immediately I regretted it.

I thought how paltry, how vulgar, what a mean act!

I despised myself and the voices of my accursed human education. 65

その直後、私は自分のしたことを悔やむ。自分のしたことが下らない、俗っぽい、卑しむべき行為であると思い、自分が従った人間としての呪うべき教育の声を蔑むのである。ここには human education という注意すべき言葉がある。the voice of my education という言葉はすでに22行目に出てきたが、その「声」とは黄金の蛇は毒蛇であり、殺さなければならないというものだった。私はその声に従って棒切れを投げつけたのだったが、その直後に自分の受けた教育が呪うべきものだったと、はっきりと述べる。

human な教育とは何だろうか。これは animal に対する言葉のように思われる。すなわち「動物を忘れた」、「人間だけに通用する」という内容を持つのである。ロレンスがこの詩で「教育」にこだわっていたその理由が、今ここで我々にはっきりしてくる。教育については、エッセイ「⁽²⁾ 民衆教育」(‘Education of the People’) の中で、ロレンスはいかに教育が誤った方法で行われているかを述べており、彼が独特の教育観を持っていたことが分かるが、この詩の中にその一端を我々は読みとることができる。彼は伝統的・因襲的な教育にとらわれず、英国人はもとより、全ヨーロッパ人、ひいては人間全体の枠を越えて、動物や植物などの命あるすべての生き物を、同じレベルで考えていこうとするのである。

And I thought of the albatross,

And I wished he would come back, my snake.

ここでロレンスはロマン派詩人のコールリッジ (S. T. Coleridge, 1772—1834) に思いをはせる。コールリッジはその詩「老水夫行」(‘The Ancient Mariner’) の中で、水夫があほうどり (albatross) を殺したことから始まる罪と償いを歌っているが、ロレンスはそのあほうどりと、自分にいま木片を投げつけられて大地の中へ退いていった毒蛇とを重ね合わせ、誤った伝統、誤った教育によって起った人間の罪とその償いを、再体験するのである。ここで蛇は *my snake* (イタリックスは筆者) と書かれていることに注意したい。この蛇はもはや普通の蛇ではなく、ロレンスと深く関わりをもつものであり、「老水夫行」のあほうどり (*the albatross*, イタリックスは筆者) と同様、人間に罪と償いの問題を、人間がいかに生きるかの問題を投げかけた生き物なのだ。

For he seemed to me again like a king,
Like a king in exile, uncrowned in the underworld,
Now due to be crowned again.

70

ロレンスが蛇をあれほどに恐れ崇めた理由が何であったかが、いよいよ明らかになってゆく。蛇は王冠を剥奪されて地下に追放された王だという、古来の聖書のイメージがあり、ロレンスはここで蛇はもう一度王冠をいただき王者にかえるべきだと言うのである。先に見たあのおっとりして落ち着いた蛇の振る舞いをみていると、まさに王者にふさわしいと思われる。

And so, I missed my chance with one of the lords
Of life.
And I have something to expiate;
A pettiness.

かくしてロレンスは「生命の王者」と出会う機会を失った。lords of life とは生き物の命をつかさどる者どもという意味であろう。expiate とは(罪を)償うという意味である。償うべき何か (something to expiate) の「何か」とは、従って何か罪深いものであり、それが次行の A pettiness である。すなわち64—65行にみられる paltry, vulgar, mean の意味するものであり、呪うべき人間中心主義の教育に従う卑しむべき俗悪さなのである。

ロレンスは炭坑夫であった父親を通して、地下の暗闇の世界に潜むいろいろなものを体験した。「恋息子」だったロレンスは、父親とは全く対照的なインテリの母親の考えに一応は従って、炭坑は暗く不健康でいやな所であるという考えを持つが、彼の中に流れている父の血によって、彼は炭坑をただ単にそのような所とばかりはみず、無限に豊かなものと考えられるようになるのである。

ロレンスの世界にみられる「闇」がしばしば二重の意味を持つのは、このような理由からである。後になって郷里から離れてヨーロッパ大陸からオーストラリアをまわり、アメリカのニューメキシコにいたって、彼はアリゾナ州の原住民ホッピー族が、毒を持つガラガラ蛇を口にくわえて行「蛇踊り」を見るが、この時の様子は次のように描かれている。

彼等は左右に身体を傾け、その度ごとに鳴り物を二度振って種子のような音をたて、重々しく律動的に足を踏みつけ、低い、重苦しい、秘密めいた詠唱の叫びをあげる。それは今まで聞いたこともないような不思議な低い声で、その人びとの行っている秘密の中にどれほど深く、深く彼等が入り込んでいるか、またどれほど地下深く、暗い道、蛇の世界へと沈潜しているかを示していた。その地下の世界では、まだ道のついていない、まだ創造されていない生の情熱の小さな川が、暗い滴る稲光のように、地球のいちばん奥にある黒い太陽から穀物の根や人々の足や腰へと勢いよく流れてくるのだ。彼は深い、ほとんど耳に聞こえないほどの蛇の言葉で、蛇や地球の内部の「太陽」から発する黒い光線に向かって叫んでいるのだ。⁽³⁾

ロレンスが若い頃からみてきた地下の世界の中に、蛇が持つ生命力を見出していることが分かる。ここではさらに、アメリカ原住民が蛇と共に「暗い太陽」や蛇へと呼び掛ける儀式なのである。

ロレンスが若いころ父から学んだ地下の闇と、そこにある人間界から超越した世界は、彼の中で消え去ることなく、シシリー島の毒蛇をへてアメリカのアリゾナに住む原住民のアニズム、蛇踊りの信仰へといたるのである。⁽⁴⁾

註

- (1) D. H. Lawrence: *The Complete Poems* (Heinemann, 1957), Vol. II. p. 77. 以下, 'Snake' の詩はすべてこの版による。
- (2) Cf. D. H. Lawrence: *Phoenix* (Heinemann, 1961), pp. 588—591.
- (3) D. H. Lawrence: *Mornings in Mexico and Etruscan Places* (Penguin, 1960) p. 80.
- (4) このことに関しては, 前掲の書の第7章 'The Hopi Snake Dance' に詳しく述べられている。また, 拙論「ニューメキシコのロレンス」(摂南大学『中研所報』第23巻, 第2号, 1990年)と, 'The Dances in New Mexico' (『英文学試論』第10号, 1991年)を参照されたい。